

「村明細帳」に残された農業水利

Irrigation-system described in “Mura-Meisaichou”

松 本 精 一

MATSUMOTO Seiichi

1. はじめに

江戸時代の各村が書き記した「村明細帳」は、領主の交代などがあつたとき、各村々から書き上げさせた、今で言えば「市勢要覧」「市・町・村の概要」というようなものである。この村明細帳には、村高はじめ人数、家数、入会山職人数、神社・仏閣、用水などが、こと細かに記載され、その時代の村の様子を知る大変有効な資料となっている。

山梨県の八ヶ岳南麓台地に位置する北杜市高根町、大泉町、長坂町及び小淵沢町の地域は、標高 600 m から 1000 m の地域に谷地田が展開しており、山梨県内においても稲作が卓越している。この地域には、村明細帳が多数残されており、記載内容から江戸時代の村々の農業水利の実態を知ることができる(図 1)。

本報告では、村明細帳を利用して、江戸時代の村(大字)レベルでの農業水利の実態把握の状況を述べる。

2. 八ヶ岳南麓台地の水田状況

江戸時代から現代までの八ヶ岳南麓台地の水田面積の推移を表 1 に整理した。

表 1 八ヶ岳南麓台地の水田面積の推移
(単位: 町, ha)

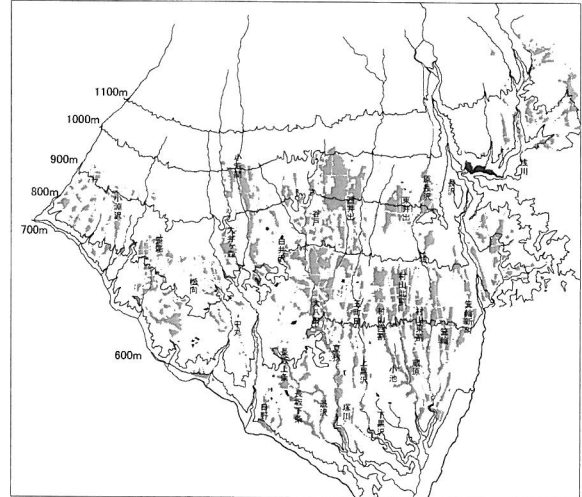
	1660年	1870年	1913年	1936年	1965年
高根町	378.6	608.4	676.0	753.9	799.3
大泉町	75.4	284.6	307.1	312.0	338.0
長坂町	293.9	443.5	486.5	542.4	559.0
小淵沢町	96.8	246.4	326.5	338.7	337.8
合 計	844.7	1,582.9	1,796.1	1,947.0	2,034.1

注) 1. 1660年は寛文検地での水田面積である。

2. 1870年は地租改正時の水田面積である。

以上のように、八ヶ岳南麓台地の水田は、1660 年の江戸初期に 844 町であったが、明治維新後の地租改正時である 1870 年には 1,582 町とまり、戦後の 1965 年と比較して 78 % の水準にあり、江戸時代後期には、地域の水田の基盤がほぼ確立したものとする。

図 1 八ヶ岳南麓台地の水田、河川及び集落の現況



3. 八ヶ岳南麓台地の江戸時代農業

江戸時代の八ヶ岳南麓の農業の状況を知らせるものに、宝暦 13 年の村山東割村明細帳がある。農業の 1 年間をみると、田では 3 月下旬(旧暦以下同じ)に早稲の苗代作りから始まり、5 月 7 日頃に田植えに取りかかり、逐次、中稲、晩稲の作業を終え、晩稲の田植えは 5 月 20 日頃に終えた。稲の収穫は 9 月であった。苗代作りでは、上・中田が 6 升の籾を播種して苗作りを行い、下田では 7 升と 1 升分多い苗を植え付けた。畑では、粟・稗・大豆を 4 月に蒔き、8 月に収穫、蕎麦を 6 月土用に蒔き、9 月に収穫した。この間、田の草取りなどが行われていた。

肥料は、田には刈敷きと呼ばれる草を用いた。畑には作物の殻が用いられた。

多くの村の明細帳には、土地条件が悪く(野土)、田も畑も一毛作(蔵原村)であった。また、水下の村では干ばつ時には早損があると述べている(村山東割村)。

(財)建設物価調査会 (Construction Research Institute)

キーワード 村明細帳、水土文化、江戸時代農業、農業水利

4. 村明細帳の記述内容

『高根町誌』『大泉村誌』『長坂町誌』『小淵沢町誌』『須玉町誌』には、江戸時代の村、全 33 村のうち 30 村の「村明細帳」が採録されている。これらの村明細帳の作成年は、1705 年（宝永 2 年）から 1828 年（文政 11 年）となっており、江戸時代の中期、後期の村の状況を知ることができる。以下に、五町田村（高根町）の 1746 年（延享 3 年）「村明細帳」の記載概要を示す。

村諸色明細帳
延宝七末年、萩原孫四郎様御検見地、
御水帳八冊
高三百拾五石五斗六升四合 巨摩郡五町田村
此反別 式拾五町七反五畝八歩 田方
式拾四町三反六畝五歩 畑方
外
一 田 九反七畝 見取
一 畑 三反四畝六歩 見取

表2 江戸時代の村々の用水水源及び用水堰の整理

旧 村	河 川 湧 水 溜										用 水 堰 等
	川	甲	宮	鳩	泉	三	女	大	そ	池	
樫 山					○						・津金用水が通る
浅 川					○						
長 沢	○										□箕輪堰
原 長 沢	○										○六ヶ村堰
東 井 出	○									1	○六ヶ村堰
堤	○										●六ヶ村堰
村山北割	○										●六ヶ村堰
箕 輪	○										■箕輪堰
箕輪新町	○										■箕輪堰
村山東割	○										●六ヶ村堰
村山西割	○	○									●六ヶ村堰・木皮堰
蔵 原	○										●六ヶ村堰、
小 池	○	○									●六ヶ村堰、・神の前堰
五 丁 田		○								1	・堰 3 6 カ所、思井堰
上 黒 沢	○	○								2	▲西沢堰、・甲川 2 3 筋
下 黒 沢	○	○								3	▲西沢堰
谷 戸					○						
西 井 出		○			○						
小 荒 間						○					
白 井 沢						○					
大 八 田				○	○					1	
中 丸									○		
上 条		○				○	○				◇三ヶ村堰・谷戸横堰
下 条		○				○	○				◇三ヶ村堰・谷戸横堰
渋 沢		○				○	○				◇三ヶ村堰・谷戸横堰
日 野				○		○	○				
塚 川				○							・大堰、・堰 2 0 ヶ所
夏 秋				○						1	
上 笹 尾								○			
下 笹 尾				○				○			
松 向								○			
小 淵 沢				○					○		

人数 三百五拾三人、内百七拾八人 男
百七拾五人 女
家数 本百姓 七拾八軒 水呑 拾軒
牛馬 式拾疋 内 拾九疋 馬 壺疋 牛
御年貢納方之儀、(略)

5. 村明細帳に記された農業水利

(1) ハヶ岳南麓台地の河川、湧水

ハヶ岳南麓台地を流れる河川は、台地東側の大門川、川俣川、台地上の西川、甲川、鳩川（泉川、宮川）、大深沢川（高川、古杣川、女取川）、小深沢川、甲六川がある。また、1000 m 付近に 37 か所の湧水があり、下流域の農業用水に利用されている。

(2) 村々の農業水利

村明細帳から各村の用水源となる河川名、湧水利用の有無、溜池の存在、用水堰の名称等を整理すると表 2 となる。

村明細帳からみえるハヶ岳南麓の村々の農

業用水の状況は、南麓に深く刻まれた川俣川に水源を求める地域、南麓の小規模な河川に水源を求める地域、南麓に湧出する湧水に水源を求める地域に大別できる。また、農業用水の利用に当たって、村山六ヶ村堰、箕輪堰、西沢堰、三ヶ村堰が 2 ～ 6 村の組合村を構成して用水の管理を行っている状況、6 村で 9 ヶ所の溜池を築造して用水を確保している状況を見ることができる。

6. おわりに

上記で示したように、地域の水田基盤が江戸時代に確立した地域においては、「村明細帳」が示す農業、農業水利の状況が、現在における農業水利体系の骨格となっていることを知る有効な手段であるといえる。